

## 第5回JOURNAL(9月25日)

イギリスから持ち帰った作品のためのピースをスタジオに広げ、制作を再開しました。9月前半たくさんの小さな実験を繰り返し、気になっていることを確認していく中で、最終的に、ほどかれた衣類の切れ端そして衣類から抜き取った糸で作った糸玉をどのように作品へと構成するかというのが今月の課題となりました。旅の途中で手に入れた衣類の切れ端、それを個々に展示するのではなく、それを使って「旅」を再構成できないかということを考え始めました。

まず、旅を一連の流れとしてとらえ、布をほどいて得た糸、糸を抜いた布で、一続きの流れを構成しようと試みました。これは旅を一枚の長い布にたとえる

Jeanetteの考えを私も試してみようと思ったからです。以前使ったことのある熱融解性の糸を使ってぼろぼろの糸や布を固定してゆきました。糸と糸ととが混ざり合っている色や、布の断片が漂い流れて行く感じが得られ気に入りましたが、同時に、布の断片が色の固まりとしては見えるものの、それぞれの布片の存在感は薄れてしまいました。訪れた場所、そこに暮らす人々の象徴として旅の途中で集めた布片は、私にとって旅の思い出の品、大切なものです。それぞれの布片の存在感、個性を失わせることなく、それらをまとめて旅の記憶を構成したいと思い、その方法を探し始めました。

そこで、着目したのが透明のプラスチック袋です。イギリスでの制作中、

布片を一つ一つ分けて保管するためにプラスチックの袋を使っていたのですが、これに布片を入れたままで素材として作品に取り込んでみてはどうかと考えました。その袋に入れた布片は、一つ一つが貴重なもののように見え、その様子が気に入っていたからです。布片を袋に入れたままコラージュしてみると、布片それぞれの存在は袋によって守られつつも、袋が透明であるので、奥にある布片の存在も眺めることができます。布片が重なりあった隙間から、別の布片が見えるという重層感が得られました。そしてそこに、訪れた土地で集めた布だけではなく、そこで私自身が着ていた服の断片も加えることにしました。私自身の服には私の記憶、そこで私が撮った写真を転写して。

私の中のその土地の記憶がほどけてゆくようにほどかれた衣類のかげらのコラージュ。このような作品を、私の訪れた各土地それぞれについて作ろうと考えています。布をほどく際に得られた糸は、紡ぎ合わせ糸玉にする予定です。

そして、糸玉には、毛糸に巻かれているラベルをまねて、それらの布が手に入れた土地の名前を記したラベルをつけてみたいと思っています。

日本ではこのところ秋がやってきたようで、とても涼しく、寒いくらいです。制作していると、イギリスで過ごした季節を思い出し、時の早さを実感します。時の早さに追い越されないように展覧会までに作品を完成させないと！頑張ります。

吉本直子